
Monochrome

雑音人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monochrome

【Nコード】

N0032K

【作者名】

雑音人形

【あらすじ】

真つ 赤な翼に真つ 赤な瞳。 紅蓮と漆黒の織り成すメロディ。
愛するために、愛されるために、それがたとえ虚偽だとしても…
…。

0：白い部屋

白い部屋。

窓もない白い部屋。

家具も、壁も床も天井も、そこに横たわる少年の死体も、死体を着ている洋服も、真っ白な部屋。

「大好きよ、本当に好きなの」

その死体に一人の少女が頬擦りをして、愛しそうに抱きしめる。気温が異常に低いこの部屋で息まで白くしながら彼女は語りかけた。

彼女もまた、白い。肌も、膝下丈のワンピースも、頭のリボンも、レースのあしらわれたチヨーカーも、真っ白。真っ白だ。

「でも、一緒にいることができるのがあと少しだけなの。とっても残念だけど、分かってね？」

彼女はそういうと、そっと死体をベッドへ下ろす。世界で一番美しいものを見るような、うっとりとした目で見つめながら、ゆっくりとおろしベッドへ深く沈むのを見届けると溜息を吐いた。

そしてそのまま、たった一つの扉へと向かいいくつもの錠をはずすと、その扉は音も無く開いた。

すべるように部屋をでた彼女の前には、張り付いたような笑顔で佇む、唯一信頼してきた彼がいた。

1：ルーシーとクララ

貴族の一家に生まれ、父や母から溺愛され育ったルーシーの十一歳の誕生日。

初等科に入学して五年間、彼女は普通の女の子だったが、ちょうど一年程前にその才能を開花させ、どこにでもいそうな明るい貴族の少女から驚くほど聡明で、運動神経も、芸術の才能も神が与えたかのような輝きをはなつマクベイン家の宝になっていた。

そんな彼女の誕生日、それが今日だった。

国の中でも上位貴族であり、この田舎町では一番の権力者である一家の子息とあれば町中が彼女に祝いの言葉をかけた。もちろんその祝いの言葉には色々な意味が込められている。貴族に気に入られない、出世したい、他のものを出し抜きたい……。

それは、彼女の通う学園の初等科でも同じで、今日は彼女の誕生日会のために特別に時間がとられている。

「ルーシー、十一歳の誕生日おめでとう。先生はこれからルーシーを応援しているわ！勉強もスポーツも頑張っつてね」

最高の笑顔をつくり、担任の教師さえ媚をうる。

ルーシーは花束を受け取ると、教師に向かい小さく微笑んだ。

そして、耳元でこっそりと呟いた。

「先生、ほっぺがひきつっているわ」

その言葉に、益々頬が引き攣るのを感じたのか、ブロンズを軽くかき分けながら後ろを向く。

ルーシーが教師から離れば、次々とクラスメイトが集まってプレゼントや手紙を渡す。

そんな中、教室の隅で一人気まずそうに視線をそらす少女がいた。黒髪のおさげにふちの太い眼鏡をかけ、地味な色をしたワンピースの後ろに何かを隠しているのだ。

彼女はルーシーと全く正反対で目立たなく消極的な性格だったが、何故かとても仲が良くいつも後ろをついて歩いていた。

「クララ、ねえ、あなたからもプレゼントがあるんでしょう？ 私一番楽しみにしていたのよ？」

クララが下を向いている間に、ルーシーは彼女の目の前まで迫っていた。

隣にはカラフルに包装された大量のプレゼントを持たされた執事もついている。

「あ……でも…みんなみたいに綺麗じゃないの……」

「そんなの気にしないわ！あなたのプレゼントにはどんな美しいものだって叶わないの！だって」

そこで言葉を区切ると、そっと耳元に口を寄せて耳打ちをした。

「みんなよりも心がこもっているもの。上辺だけのプレゼントはうんざりなの。ね、くれるでしょ？」

言い終われば顔を離し、眩しい笑顔で微笑む。先ほどまでの美しく可憐に作られた笑顔とは違った、愛らしく明るい彼女の本来の笑顔だ。

その笑顔にほっとしたような顔をみせたクララは、小さい木製の箱を差し出した。その箱には申し訳程度に金色の装飾がされているだけで、到底貴族へのプレゼントとは思えなかった。

ルーシーへのプレゼントに本来ならそのようなものが相應しいは

ずがなく、先ほどの二人の会話を聞かなかった（聞こえなかった）周りの生徒や教師は蔑みの目や、嘲笑うような表情を浮かべたりもした。

自分の誕生日に粗末なものが送られたお嬢様は、きつと今度こそ愛想を尽かすと思ったのだ。

しかしルーシーはクララを強く抱きしめた。

「ありがとうクララ！本当に嬉しいわ！！ねえ、これってなあに？どうやって使うものなの？」

その嬉々としたようすにまわりは落胆し、嫉妬の混じった非難の目をクララに向ける。

クララはそれに気づいていながらも、なるべく視界にいれないようにしてルーシーへと言葉を返す。

「それは……オルゴールよ……。お気に入りの曲なんだけど、気に入らなかつたらごめんなさい……」

顔を赤らめながら、ぼそつと説明をすると、笑みを浮かべて恥ずかしそうにまた下を向いた。

そんなクララの様子をみて、ルーシーは可愛い可愛いと騒ぎ立てそのまま執事を引き連れ二人で帰ってしまった。

その場に残されたクラスメイト達はルーシーへの妬みで作り上げられた事実でない悪口を、決して彼女の家のものの耳に入らぬようにこそそとと呟きあい、教師達はため息をつきながら、雇われた庶民の掃除屋に教室を片付けるように指示をだした。

そんな教室のよんだ空気と違って、クララとルーシーの乗る馬車はあたたかい雰囲気で包まれていた。

家での誕生パーティーに、ルーシーの強い願いによってクララも招待されているのだ。

「ねえ、このオルゴール本当に素敵ね！私嬉しいわ」

「あ…ありがとう…。喜んでもらえて、私も嬉しい」

ルーシーは深く息をすい、そして大きく吐いた。

学校でも家でも町の中でも、どこでも緊張がほけない彼女にとって一人になれる（今はクララと二人だが）馬車の中が唯一の安息の場所だった。

クララはルーシーにとって、特別な、同じ気持ちを通じ立場で分かち合える存在なのだ。

なぜなら、多くの者が地味なクララに興味を持たないため、その出生を知らないが、クララはルーシーの家と同じ位にいる貴族の娘なのだ。

内気なクララを外へだして何も知らない場所で友人を作らせようとした彼女の両親が、都市からこの辺鄙な田舎町に内密に送り出したことから、彼女の名が知られていないだけで国の規模で見ればクララ一家も同じく有名だった。

「この木…叩くととても良い音がするわ。なにでできているの？」

「あ……………、それは、この前送られてきた千年樹の枝でつくったの。金の装飾はね……………恥ずかしいんだけど、私が書いたの……………」

顔を赤らめながら話すその姿に、ルーシーはクララへと愛しさを募らせる。

それは友情のそれでこそあって、他の感情ではなかったが、深く大きくどの感情にも勝るものだった。

そんな他愛のない話しをしながら、馬車に揺られていると、馬車は静かにとまり扉が二度ほどノックされた。

「お嬢様、つきました」

「あら、もう？今日はクララといたからかしら。時間がたつのが早かったわね。待ってね？降りるから。」

ルーシーは若干早口でまくし立てると、クララに笑いかけてから扉を内側からノックしかえした。

すると、執事が手を差し伸べ、ルーシーがクララに道を譲る。

「ルーシーちゃん……？」

「ほら、早く早く」

華やかな今日の主役である彼女より先に馬車を降りることに抵抗を覚えながらも、クララは言うとおりに執事の手をとり、ゆっくりと降りた。

降りれば、まるでクララの誕生日かのようにたくさんのメイドが彼女を向かえ、あつという間に屋敷の一室へと連れて行かれていた。中には、色とりどりの衣装とアクセサリーがおいてあり、使用人が笑いかけながら彼女に面白い話を聞かせる。ふと、途中で顔を上げて鏡をみれば、学校とは違う社交界でのクララの姿が映し出された。

クララが美しく変化をとげているとき、ルーシーはいつもとなりにつかせている執事と馬車のそばで話しこんでいた。

「では、よろしくね？」

「ええ、お嬢様。わかっております」

意味深な笑顔を浮かべた二人を、遠くから母が呼ぶ。

「ルーシー？そこにいるの？さあ、着替えの時間があるのだから早くお入り？」

ルーシーの母メアリーは重い病気をわずらい、外気に触れることを禁じられているのだが、自分の愛娘の到着を待ちきれなかったよ
うで、メイドに制止されながらも窓から顔を出している。

「お母様！！だめですわ。お部屋に戻って？すぐに行きますから」
さつきまでの笑みに変わって心配そうな表情をつくり早足に扉へと向かう。

一方執事はなにやら専門用具のならば個室へと入っていつてしまった。

ルーシーが扉の前にたどり着けば、いつもよりも少し派手な格好をした使用人がそつと扉を開き、彼女に微笑む。

「ありがとう、マイク」

ルーシーも微笑み返しお礼をいいながら、スカートの裾をつまみちよこんと頭を下げる。

「良いお誕生日を、ルーシーお嬢様」

学校とは違い心よりあたたかい言葉を投げかける使用人達だが、ルーシーが浮かべる笑顔はかわらず作られた清楚で可憐な完璧な笑顔だ。

そつして母の部屋に駆け込むと、メイドが頭を下げて退室していく。

その後姿を見送ると、メアリーの胸に飛び込んだ。

「ルーシー、誕生日おめでとう」

「ありがとうございます、お母様！そういうえば、今年の約束覚えてる？」

母に抱きつきながら、上目遣いで聞いてくる娘に、メアリーは苦笑を浮かべながら頷く。

「ええ、覚えていますよ。覚えていますとも。これよね？」

そういつてメアリーが取り出したのは、蝶と十字架のモチーフが重なったダイヤのネックレスだった。

「わあ……やつぱり何度みても素敵ね。お母様、大切にしますわ！」

「今日のパーティーにもそれをつけるのが私との約束よ？」

その言葉に一瞬顔を曇らせたルーシーだったが悟られないように笑顔を浮かべて頷いた。

「ええ、もちろん。お母様のネックレスだもの、どんな服にも似合うわー！」

その言葉に安堵した母がゆっくりとベッドへと足を運び、疲れた顔をして横になるのを見ると、彼女はベッドの横に立った。母はそんな娘の額にキスをしてそっと目を閉じた。病気のためか、座ることも大変な体力をつかってしまうのだ。

ルーシーは母が眠りに落ちていくのを見ながら、額にキスを返した。

「お母様、今日の出来事は明日報告にしにきます。ゆっくりお休みになってね？」

メアリーが頭を縦にふると、ルーシーは背を向けて扉に手をかけるべく音を立てないように部屋を出た。

廊下に出ると左右を見渡し、誰も来ないこと確認して袖で額と唇を拭い顔から表情を失くすが、少しすると何事もなかったかのようにまた笑みを浮かべパーティーの用意をするために、長い廊下を進み自分の部屋へと向かった。

大きな扉を開け、フリルとピンク色が主体になった自分の部屋には不釣り合いな、真っ黒な燕尾服に身を

を包んだ執事の前へと行くと、そっと引かれた椅子に腰掛ける。

「ねえ、ジェイル。今日は何色のドレスなの？」

馬車の御者からドレスアップや化粧、ルーシーの身の回りのことは全てこなすことができる万能な執事に声をかける。

「今日は薄い青にしようと思っております。普段身にまとわない色ですが、とても良い色合いなのですよ」

そういいながらドレスの入った包みを開けて彼女の前へと差し出す。

「私の趣味には合わないけど、いいんじゃないかしら？」

いつもの上品で愛らしく、どんな者にも公平に接するお嬢様の仮面を捨て去り、唯一彼にだけ見せる表情と声色で返答をする。執事はそれをさほど気にする様子はなく、手際よくドレスを着付けていく。

あつという間に学校指定の制服から今日の社交界の華へと変身を遂げると、長い金髪をくるくると指に巻きながら遊んだ。

「いつだったかしら、彼を手に入れたのは」

「半年ほど前ですよ」

彼女の唐突な質問にも間を空けずに答え、最後の仕上げにルーシーの唇に真つ赤な紅を引く。
唇についた色に顔をしかめながらため息をつく、眉間にしわを寄せ悲しそうな顔をした。

「ここにきて、私の嗜好に会う子をやつと見つけたのに、もう移動の時間なのね」

「ええ、もうこの一帯には墮天使はいませんから、どこかに移動したと考えなくては」

「あら、失礼ね。私を忘れていてでしょ？ここに一人いるじゃない」
ルーシーはおどけてみせると、目を細めた貼り付いた笑みを崩さない執事に不満そうに首を振った。

二人にしか通じない不思議な会話をしていると、弱々しく扉が叩かれる音が耳に入る。

「あの、ルーシーちゃん……いるかな？」

ソプラノの甘い声を聞くと、彼女は満面の笑みを浮かべた。クララが相手のときにしか浮かべない、明るい笑顔だ。

「クララ！」

勢いよく走ると、自らの部屋にクララを迎える。

「わあ！クララ可愛い！お人形さんみたいね」

オレンジ色のコサージュのついた白いドレスを着て、恥ずかしそうに立っているクララを少し強めに抱きしめると、その頬にキスをした。

「あ……」

ルーシーが離れると、彼女がキスをした場所を押さえながら耳まで真つ赤になって俯いた。ルーシーはその様子をクスクスと笑いながら見つめると、ふと我に返ったように執事へ問う。

「パーティーの時間、大丈夫？」

「まだ少しありますが、そろそろホールへ移動しましょう。お客様はお嬢様をお待ちですから」

「うーん、クララともう少し二人でお話したかったんだけど……」
困ったように首を傾げ、やや潤んだ目でクララを見つめると不満そうにジェイルに視線を戻し、お願いをするように手を合わせる。

「ルーシーちゃん……駄目だよ。また今度遊ぼう？」
困ったような彼女の声に渋々というように頷くと、執事の手をとった。

部屋の外に出るとメイドが二人控えており、クララの後ろに付き誕生パーティーを行う部屋まで付き添う。

クララの前には今日の主役とその執事が背筋を伸ばして真っ直ぐと前へと歩いていった。その様子に尊敬と憧れを覚えながらも、クララは少しの違和感を覚えていた。

確か昨年の誕生日会はこんなに盛大なものではなかったし、ルーシーは明るく優しい性格だが今ほど自信に満ち溢れた顔をする事はなかった。

彼女はこの一年で大きく変わったような気がしていた。

しかしそんな考えは、扉を開く寸前にクララに向けられたとても優しい笑顔によって止められた。

漏れてきたシャンデリアの光に目を細めながら、その笑顔が光の中に進むのを見ると何故だか胸が苦しくなった。彼女が光に溶けていってしまいそうで怖かった。焦って手を伸ばそうとしたその時

「クララ様、前にお進みください」

「あ、ご……ごめんなさい」

後ろからメイドにささやかれ、急いでルーシーの後を追う。

大きな拍手と沢山の笑顔に迎えられる彼女を見て、そこに存在することを確認する。自分は何を不安に思っていたのだろうかと考えたが、ルーシーに手を引かれたので何事もなかったように繕い、彼女に祝いの言葉が投げられる道と一緒に進んでいく。

ステージ脇まで来ると、そっと彼女から離れて同じように離れていった彼女の執事の隣に立つ。

パンパン

「あゝ、静粛に！」

クララとジェイルとは正反対の位置にいるタキシード姿の男性が、手を叩き声を張り上げればまだ少しざわついてはいるものの、二百人はいるだろう招待客は皆ルーシーのほうに顔を向けた。

「本日は、わたくしの誕生会にお集まりいただきまことにありがとうございます。今日は楽しんでいてください」

言い終えてドレスの裾をつまみ、可愛らしくペコリと頭を下げれば、愛らしいその姿に自然と顔が綻ぶ。

「それから、お父様から皆様にお話があるそうですので、ここから先はお父様に変わりますわ」

彼女の父が、先ほどまで彼女が立っていた場所に立てば、ルーシーはクララのいる側に降りてきた。そして、父親がルーシーの婚約者を募るスピーチをしているというのにまったく気にしていない様

子で、クララが心配するのをよそに来てくれた人たちに挨拶をしよ
うと会場の真ん中へと出て行ってしまった。

眼鏡をかけた少女が急いで後を追ってくるのが視界に入り、少し
歩調をゆるめると、彼女は隣にいた執事に問う。

「ねえ、さっきから甘い匂いがするわ。きつい香水みたいなあの匂
い。もうこの町に墮天使はいないんじゃないの？」

「……申し訳ありません。気配を消されていたようで私も今気づき
ました。」

あからさまに顔をしかめる彼女の肩が後ろから軽く叩かれる。

はつと顔を引き締め、また可憐な笑顔を浮かべて後ろを向けばそ
こには高価そうな宝石を沢山つけた伯母が立っていた。

「伯母様、こんばんは」

先ほどステージでしたことを繰り返すように、ドレスの裾をつま
んでちょこんとお辞儀をする。

「まあまあ、今日もとっても可憐なこと。元気そうで何よりだわ。
そういえばルーシー、聞いたわよ？この前のテスト学年トップだっ
たんですってね！おめでとう」

「ありがとうございます、伯母様。」

「去年まではパパの後ろに隠れて、私と目も合わせてくれなかつた
っていうのに、大人になったのね」

ルーシーは皮肉交じりに言う彼女を見て、悲しそうに瞳を潤ませ
ると下を向いてつぶやくように言った。

「ごめんなさい、伯母様。私どうかしていましたわ……。本当に……
グス……反省してますの」

その様子に周りがざわざわとし始めると、慌てて彼女の背中をさ
すり大丈夫よ？としきりに繰り返す。下を向いて泣き声を漏らすそ

の人の目に涙なんてなくて、それどころか舌を出しているなんて思いもしなかったのだろう。

「もう大丈夫ですわ。泣いたりしてごめんなさい、伯母様」

「いいのよ、気にしてはいないわ。こちらこそごめんなさいね」顔を上げて涙を裾でぬぐう振りをすれば、周りから白い目で見られるのに耐え切れなかったのか言葉を詰まらせながら返事をして、そっと自分の夫のもとへと帰っていった。

伯母がいなくなってから、続々と挨拶に来る人で囲まれたルーシーは、笑顔で沢山の言葉をかわしながら伯母と話している間に姿を消した自分の執事を探した。

ホールの隅から隅まで見渡して、やっとレースのカーテンがひらめくその奥のバルコニーにその姿を見つけると、少しずつ移動しながら話しかけてくる人に対応していった。

彼のもとにたどり着くころには皆思い思いにパーティーを楽しんでおり、見知った顔を探しておしゃべりに勤しんでいた。

クララも古い知り合いに話しかけられたらしく、その相手をするのに精一杯といった様子だった。父も伯母も自分のことを見ていないのを確認すると、かすかに風が吹くバルコニーへと足を踏み出した。

バルコニーに吹く風は、美しい金髪を揺らして彼女の顔を隠す。それをうざったそうに手でかき分ければ、青かった瞳を紅蓮に変えたルーシーの顔が現れた。

満月の下、室内のシャンデリアの逆光で見えない顔に二つだけ、真っ赤に真っ赤に光る瞳。

「ねえ、執事なのに主人のそばから離れるなんて、とっても非常識じゃない？」

後姿のジェイルに話しかけると、ゆっくりと振り向く彼を見た。

「クララがね、気づき始めたみたいなの。私が私じゃないって。このくらいの幼い少女なら騙せると思ったんだけど、逆に幼いときの不思議なつながりっていうやつで気づかれちゃったわ。」

ジェイルは目を伏せると、一瞬だけ（本当に一瞬だけ）辛そうな顔をした。

「ねえ、ねえってば。何か言いなさいよ。貴方が私の質問に答えないのって、何だか不気味だわ」

そういつて真っ赤な柵に腕をかけて、月を見上げた。

そこに小さな足音がかけてきた。バルコニーへと出てルーシーに声をかけようとした足音の持ち主は、振り向いた彼女に向かって短い悲鳴を上げた。

1：ルーシーとクララ（後書き）

はじめまして、珀深濤と申します。

小説を書くことにあまりなれていないので、至らない点もあると思いますが、あたたかく見守っていただければと思います。

2：記憶の修復

振り向いてから「しまった」と思っても、それはもう過ぎたことで、今更どうにも出来ないことだった。

口元を押さえて、驚きのあまり立ちすくむ彼女を見て、紅蓮の瞳の持ち主は嘘ではなく、今度こそ本当に涙を流しそうな顔をした。

三人の男女が立つバルコニーに、満月の光が降り注ぐ

「ルーシー様、貴女の言うとおりにいたします。お話しますか？それとも記憶を？」

問いかける彼の声は、優しさを帯びていた。いつも、この時だけだす声。

「話しましょう。この子は今までの子の中でも特別よ？幼いこの子には酷なことかもしれないけれど」

その言葉を聞いて、彼、ジェイルは指を鳴らした。

ぱちんという音と共に、聞こえるのは風の音のみとなった。

閉じられた室内への扉の向こう側では、今でもパーティーが行われている。グラスを片手に話し合う人たちが溢れていた。

しかし、その話し声が聞こえない。これだけ近いグラス一枚の距離であるはずなのに、どこか遠く届かない世界に来たかのようだ。

そんな中、怯える眼鏡の少女に向かって、もう一人の少女が声をかけた。

その少女は、ドレスも同じで控える執事も同じ人なのに、先ほどとはまったく違う顔をしていた。瞳だけでない。顔自体が完全に別人のそれだった。すくなくともクララの知る人ではなかったが、顔以外は確かにずっと仲良くしてくれた友人なのだ。

「驚かせてごめんね、クララ。」

一歩、足を踏み出してクララの頬に触れようと、ルーシーが手を伸ばす。

「ひっ」

また、小さく悲鳴を上げてあとずさるクララ。

その反応に力なく手を下げ、悲しい笑顔でまたバルコニーの縁へと戻るルーシーは、そっと口を開いた。

「ごめんなさい、でもわかって。いきなり言われても信じられないかもしれないけれど、貴女の知っていたルーシーは死んだわ」

目を見開くクララは、訳もわからず一歩下がってガラスの扉に背中をつけた。

「一年前に、貴女の知っている友人は死んだの。そして一年間、私は死んだ彼女のふりをしていた。きつと意味がわからないでしょうね。そうよね、突然こんなことをいわれても困るわよね。でも貴女にだけ、記憶を戻してあげる」

そうだった彼女は、静かに月を見上げた。

すると目をつぶり、美しい声で歌を歌いだした。

物悲しい旋律にのせて、閉鎖された空間の中紡がれた言葉はルーシー自らの両手を剣に変え……紅蓮の翼を生やした。

「ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

痛みだった。

クララが翼と腕の剣を目にした瞬間、全身に強い痛みと悲しみが襲った。

そして映像が頭の中いっぱい流れ込んできた。

海だ。視界いっぱい広がる青くて大きな海。それをルーシーとクララはがけの上から見ていた。

やわらかい笑顔で何かを話しかけられるが、クララには聞こえない

かった。口も、腕も足も、自分の体なのに動かせない。それらは勝手に動いて、聞こえない彼女の言葉に返事をしていく。

延々と続く崖と、三メートルほど離れた位置からおしゃべりを楽しむ二人。あたたかい太陽の下でのあたたかい時間……。

しかし……しかしそれは、クララがルーシーの後ろに舞い落ちてきた黒い羽根を見るまでの平穏だった。

その羽を見た瞬間、クララは、動かせない自分の体と意思の中で全てを思い出していた。

もつと海に近づこうと、崖の方へと足を進める彼女と自分に、いやだいやだと脳が悲鳴を上げる。全力で否定して、能天気な一年前の自分を蹴り飛ばして体を動かしたくなる。

でも、彼女が体をコントロールすることは出来ない。

記憶の中に落とされた彼女には、どうしようもできないのに、足掻き悶え苦しむ。

ルーシーの笑顔に、涙で視界がかすむ。結末を唐突に思い出した？今の？クララが過去の記憶の中でどれだけ、だめよと伝えても、口がそのとおりに動くことはない。

彼女が思い出したとおりに事は進んでいく。

止まらない記憶。思いっきり叫ぶ。届くことのない絶叫が小さなクララの体内で響く。

そして、青い空が黒い羽で覆われた。

大きな黒い羽を広げた男が、ルーシーに？降ってきた？

そしてルーシーは笑顔のまま倒れて、海に落ちる寸前で止まった。その上にはルーシーに降ってきた男が乗っていた。下敷きになった彼女は、その衝撃で潰れていた。

おかしな方向に折れ曲がった両手。潰れた腹部からは夥しい量の紅が溢れ出す。地をそめ、木々や花々に染み渡っていく。

血の海の中から、立ち上がる黒い羽の男。

そして、その男の正面に降り立った、両手を刀に変形させた赤い羽の……天使。

そのときのクララが呆然とそれを見つめ、？今の？クララが小さい体を擦じらせながら叫び続ける中で二人の墮天使は激しく攻めあつた。

常人には見えることのない速さは、クララの目には残影となって映った。影が激しくぶつかり合つて、どさつという音と共に狂った笑い声が辺りに響いた。そしてその笑い声を発した黒い天使は、そのちょうど七秒後、ぴくりとも動かなくなった。

その黒い天使が死んでから、視界は一気にクリアになって、声も聞こえるようになった。ただ、自分を操れないことは変わらなかつた。そんな中紅い羽を持つ天使はクララにやっと気づいたようで、眉を寄せてから近づいてきた。

「……貴女、お名前は？」

「あ………あぁ」

当時の彼女の口が動き、声にならない声を発する。
中で絶叫を上げている彼女も、声にならない声をだした。

その天使の顔は、バルコニーで妖しく紅蓮の瞳を輝かせていた、ルーシーだった。亡骸になってしまったルーシーと、一年のときを共に過ごしたルーシー。二人の「ルーシー」がクララの前にいる。

クララの頭はパニック状態だった。記憶が一度に戻った混乱に加えて、目の前で友人が死んでいる光景をもう一度見させられるという残酷な仕打ち。

それでも記憶の中の時は進み、紅い天使は亡骸を見つめて、問うてくる。

「この子、お友達かしら？」

「ルー……ルーシー？」

クララは指差された方向にある一つの肉塊を再度見つめなおした。やっと頭が追いついてきたのか、顔から一気に血の気が失せる。

「あら？おかしいわね。私は貴女に名前いつてない気がするのだけ
ど。ねえ、どこで……」

「ルーシー？……ルーシー！ルーシー！……いやっ、いやああ……」

「ああ、この子の名前もルーシーって……」

「やだっやだああ！！血が……！止まって！お願いだから止まって
……」

酷くひしゃげたその亡骸を抱えて、狂ったように叫ぶクララを見

て、翼を生やしたルーシーは面倒くさそうに眉間にしわを寄せた。
しかし、何かを思いついたようで、ニヤツと唇の片端を上げると
いつの間にか彼女の後ろに立っていた燕尾服の男 ジェイルに声
をかけた。

「ねえ、ジェイル、この子黙らせて。いいこと思いついちゃった」
「御意」

ジェイルは泣き叫んでいるクララに近づくと、後ろから軽くクラ
ラに触れた。

その瞬間、彼女の膝は落ち、声もでなくなつた。

気を失つたのだ。

3：狂気と悦楽

記憶の中で意識が落ちた瞬間、クララはまた、夜風が吹くバルコニーへと戻ってきていた。

「どうして……そんな……嘘よ、嘘。ルーシーちゃんが死んだなんて、ありえない。……今のは私の勘違い。違う、ちが……」
「嘘でも、間違いでもないの。わかってるでしょ？クララ」

ゆっくりとした足取りで、ジエイルに向かって歩いていくルーシーが、クララの言葉をさえぎる。

いつもの笑顔でも、嫌なことがあった時にする眉間にしわの寄った顔でもない。とても悲しそうで、今にも大粒の涙がボロボロと落ちてきそうなほど、寂しさに歪んだ顔。

ただ、言葉にならない言葉をつぶやき続けるクララに、彼女はもう一度向き直り、ジエイルの隣で話し始める。

「あのね、クララ、私は墮天使といってね、神様に嫌われた一族の生まれなの」

「墮……天使。墮ちた天使……。でも、でも」

「いるの、本当に。神話の中の出来事じゃないの」

「羽……。ああ……。あれは本当にルーシーちゃん……？」

痛みに耐える様な表情で、頭を抱えながらもルーシーの言葉に返事をしていく。

しかし返事をしているといっても、クララの目は虚空を捉えて、決して前を向くことはない。

「そう、私よ。あのね、私は墮天使だけど、神様に機会を与えてもらった墮天使でね、この紅い羽はその証拠なの」

「機会……？」

「私は墮天使と墮天使の間に生まれた突然変異の子だったの。沢山の黒の中で、私だけ紅い目と羽を持っていたのよ。五歳になって、三ヶ月経ったある日、神様が私の脳内に話しかけてきた。『お前が何故、紅い目と羽を持つのか教えてやろう』と……」

彼女は語った。自分の姿を。

強大な力を持つ墮天使の父親と、美しく才に満ち溢れた母の間に生まれたルーシーは、生まれつき紅い羽と瞳を持っていた。その妖しい見掛け故に疎まれていた彼女の、五歳の誕生日。その日に彼女は「神からの声」を聞いた。紅い目と羽の秘密を知りたければ、天界に来るためにその家をでなさい。地と下界を繋ぐ鎖がある場所で、天からの使者を待ちなさいと。

冷たい床で、一人過ごす誕生日に哀しみを感じていた彼女は、その言葉に従って家をでた。途中何度も見張りに見つかりそうになりながら、必死に走り続けた。そして、彼女は初めてみた白い羽の天使に連れられ、天界を訪れる。

そこで彼女は、とても美しく慈愛に満ちた瞳をする青年に出会う。それが「神」だった。そして、彼女は歌によって様々なものを操ることができるとを教わり、沢山の墮天使を消滅させることを頼ま

れる。

「それから、もう百年以上が過ぎた。堕天使の数は減少しているけれど、まだまだ消滅には程遠い。ただ滅するだけの日々には飽きた私は、貴女の死んだ友人に成り代わって人間ごっこをすることを思いついた。クララと会って話すことを重ねるたびに、何てことをしちやっただらうって思ったのよ？何て取り返しの付かないことを……と」

「ルーシーちゃんは……戻ってこないの……？」
今まで黙っていたクララが、唐突に口を開く。

「戻ってこないわ。彼女は死んだの」

静かに、何度もクララに告げた言葉を繰り返す。

再確認した言葉に、既に血の気がうつせていた顔が、益々青くなっていく。大きな瞳にいっぱいいっぱい涙を浮かべ、その涙がこぼれる瞬間に膝が落ちる。

ルーシーがクララに近寄ろうとすると、後ろからそっとジェイル

に抱きしめられた。

「いけません、ルーシー様。彼女が自分で乗り越えられなければ記憶を消すというルールは、どんな者にも分け隔てなく執行されるべきものです。お辛いのはわかりますが、控えてください」

「ジェイル、わかってる。ごめんね」

「謝らないでください、私は……………」

バサ、バサ、バサ、バサ

哀しみに満ちた空間に、突然風が吹いた。

「チツ、こんな時に厄介な」

ルーシーが乱暴に吐き捨て、もう一度小さな声で歌い、すっかり元に戻っていた両手を再度刃に変える。

彼女の獲物のお出まじだった。

「すっかり忘れていたわ。一匹取り逃がしてたんだっ」

「また察知できなかった……申し訳ありません、こやつは今までの雑魚とは違うようです。いけますか？」

「もちろん。私を誰だと思っているの？」

クララが膝を落とし、絶望の表情を浮かべた顔を両手で覆ってい

る時、黒い天使は閉鎖されたその空間に割り込んできていた。

唇の片端を上げ、あざ笑うような表情を浮かべるその黒い羽の天使は、ルーシーを一瞥すると機嫌をよくして笑みを深めた。

そつと、クララをかばえる位置に移動しながら、ルーシーも笑みを深める。

黒い墮天使よりも、欲深く傲慢に紅い瞳に光を宿らせて、獲物を見つけた彼女は唇を舐めた。

「シンガー、やっと会えタ。われらが父が僕にも機会をくれタ。貴女と戦えるなんて夢のようです。

貴女との戦いは、死と隣り合わせの危険な、しかしとても刺激的な快楽を味わえると言ウ。僕、期待してたんですから、楽しませてください！！」

狂った声を上げるその姿は、幼くして成長の止まったルーシーよりも若く、そして中性的で妖しかった。

羽をたたむ様にしてバルコニーの柵の上へと降り立った彼は、ま

だくつくつと笑い声を漏らしている。

「貴様、どうやって私の作った閉鎖空間に入った？」

ジェイルがいつもの笑顔をすっかり消して問いかければ、目の前の墮天使は笑い声をぴたりと止めて、ジェイルを真っ直ぐ見つめた。「聞きたいですか？そうですか！！では、教えてあげましょう。我らが墮天使の王は、いつまでもやられっぱなしでいることに飽きたという事です。貴方達のなぞを謎のままにしておくのを止めたのですヨ」

「……それは、私の術を見破ったという事か？」

「フフフ……いつまでも有利で居られると思ったら大間違いなのでス」

自慢げに語った彼が、また笑みを深めれば、その右手に巨大なランスが現れる。

「貴方、お名前は？私はルーシー。シンガーじゃないわ」

余裕の表情を浮かべながら、ルーシーは彼に問いかけると、低音で音を紡ぎ始める。

「自分で話しかけたのに、歌い始めるとハ……なんともマイペースな人ですネ。私達の間では貴女はシンガーと呼ばれてイル。貴女の名前がどんなものだとしても、私は墮天使の誓いにかけてシンガーと呼ばせていただきます」

彼が言い終えるまでに歌の一節を歌い終えたルーシーの両手には彼と同じくランスが握られていた。

「私にマイペースと言っただけで、貴方も名前を言っていないわ。」

シンガーと呼びたいのならそう呼べばいいけど、自分を消滅させる相手の名前くらい、知っておいたほうがいいとおもったの」

「おやおや、それはどうもご丁寧二。ですが、残念ながら僕は消滅などしません。しかし貴女がそれほどまでに僕の名前を知りたいのなら教えて差し上げましょウ。僕の名はエド。これでも第三部隊の隊長を務めているのでス」

隊長という言葉に、ルーシーはわずかに顔をしかめた。たった五年しかいなかった下界だが、隊長と言う名の付く者には特に差別されてきたからだ。

しかし、今思うと彼らは正しかったのかもしれない。百年経った今、ルーシーは墮天使を裏切りこうして神のために戦っているのだ。

「ふーん、隊長？じゃあ少しは手応えがあるはずね。久しぶりに楽しめそうだね。ジェイル、クララのそばに居てあげて」

「しかし……」

「いいから言うとおりにしなさい」

「……………わかりました」

ジェイルが渋々首を縦に振るのを見て、ルーシーはランスを構えた。

腰を落とし口を開くと、また歌を歌い始めた。

彼女は歌によって様々なものを操るが、それは何も人だけには限らない。元々は古代語を話すことによって人を操る力を生まれつき持っていた彼女だが、神に教えてもらったメロディーにのせることで物も操ったり召喚することができるようになっていた。

先ほどランスを出したときよりも低く重く、暗い音を奏でれば、エドの顔から笑みが消える。

ズズツという音をたてて、岩が持ち上がっていたからだ。

エドを囲むようにして浮かんだ岩は、どれも重く先がとがっているものばかりだった。

そして、ルーシーの歌っていた歌がぴたりと止んだ

「ステイラ」

ガンッ

正面から襲ってきた岩を槍で弾けば、今度は右から細かく鋭い石が飛んでくる。

「クッ」

その一つが腕を掠めれば、二の腕に小さな切り傷が出来る。しかしそれに構っている暇はなく、今度は大岩が両サイドからエドを襲う。

「フッフ、油断していましたヨ。今度は……僕から行きます」

エドがそう呟くと、ルーシーの視界から消える。

「どこを見ているのですカ!!!!」

一瞬目を見開いたルーシーに、自ら叫び声を上げれば直後に上から物凄い風圧が彼女を襲う。咄嗟に持っていた槍を頭上でクロスさせれば、上空から落下して重さを増したエドの槍が押し掛かる。

「反射神経は中々のもののようにです……ネッ!」

嫌な金属音があたりに響く。

ルーシーの口は動き続け、岩は彼女の思うとおりにエドを襲う。

空中を飛び回る岩の間をぬって、二対の白い槍でエドを激しく攻め立てるが、長さのある彼の武器にことごとく止められる。

しかし、ルーシーの口角は上がっていた。楽しそうにふふつと笑い声を漏らすと、エドから飛び退き十メートル程はなれた位置に着地する。

降りた地で目をつぶるルーシーの歌はいつの間にか高音になっており、先程まで轟音が鳴り響いていた土地に美しい旋律が刻まれる。エドはすかさずルーシーの目の前に飛び込み、首元を目掛けて突くが突然現れた太い木の枝によりそれを阻まれてしまう。

ミシミシとなり木に埋まった槍を勢いよく引き抜き、もう一度、今度は頭蓋に向けて突くがまたもや反対から現れた木に阻まれる。

「自然が味方とでも言いたいのですか？僕はそんな……………」

ガッ

エドが何かを言おうとした瞬間に、木が弾ける。その破片に視界を奪われない様に慌てて後ろに飛び退くと、その中心に白い光に包まれたルーシーが現れた。

そして、そのルーシーの紅の羽が

四対になった

白い光が段々と薄れていくと、エドはぞくぞくとするような殺気を感じた。

それは恐ろしくも美しく、危険な快樂だった。思わず目を細めて乾いた唇を舐める。

「これのことですか……。体の心からゾクゾクしたものがせり上がってきます！」

エドの全身に鳥肌が立ち、恍惚とした表情を浮かべると槍を構える。

「あら、そう？ 私もなの。この技を使うといつもよ。ねえ、エド、楽しみましょう？」

まるでダンスをしているようだった。

滑らかで繊細に、組み合わせ離れそしてまた火花が散る。

二人の姿は影となつてしか捉えることが出来ず、衝撃音さえも遅れて聞こえる

そして二分程打ち合った末にルーシーが受け止めた槍を、思い切りつき返すと、エドの体が後方に大きく飛んだ。

轟音を立てながら大きな木に衝突すると、よろよろと立ち上がる。その表情は相変わらず恍惚としていて、頭から流れ出る自分の血液を口に含みそのまま飲み込む。

「……自分の血さえも甘美に思える。最高ですネ。これほど心地いいものだったなんて。しかしこれはまずい。フッフ……また出直してきますヨ」

「なっ……まてっ」

よく見れば頭だけでなく、腹部も真っ赤に染まっていた彼は、閉鎖されていたはずの空間から逃亡しようと舞い上がった。

ルーシーも一気に舞い上がりそして加速するが間に合わず、滲むようにして暗闇へと沈んでいつてしまった。

「ジェイル、早くといて!!」

「いけません、ルーシー様。今術を解いてしまえばクララ様のこの姿が見つかってしまいます」

「ちっ!」

エドの消えていった空間を鋭く睨み付けると、イライラとした様子で地に下りる。

握り締めていた純白のランスを手放して、紅い翼を折りたたむと、羽はその背に消えていく。

クララにもう一度目を向ければ、意識を失ってジェイルの腕に抱かれる彼女が視界に入る。

きつく鋭かった目が和らげば、先程までの怒りの表情とは打って変わって辛そうに顔をしかめた。

4：別れと来訪

クララはすっかり意識を失っていた。

彼女は何かにうなされしきりに顔をしかめる。体からは大量の汗が噴き出しているためドレスも肌にびたりと張り付いている。

ただ無垢であったはずの少女の姿に、ルーシーはその双眸に暗い影を落とす。

「駄目だったのね。彼女は耐え切れなかった。元々この子に会うまでは、人間なんて……特に子供なんて大嫌いだったから、はじまりが酷かった」

でも、それでも離れたくないほど特別で

ルーシーはその言葉を飲み込む

クララのほかにも稀に、彼女の姿に気づく者がいた。

そんな時は記憶を消してそのまま眼前から消えてしまつか、真実を告げ血にまみれたこの旅の安息の場所として、たまに寄らせてもらうかのどちらかに一つを選んでいた。その選択権は彼女にあったが、ルーシーの様子を天使の監視役から聞かされた神が、「もし、真実を告げられて耐え切れなかった場合、記憶を消してすぐさま立ち去ること」という掟を定めたのだ。

ルーシー自身が、自ら自分の正体を曝すようなことは、彼女の神への忠誠心からしてありはしない。しかし、人間に混じって生活をしながら墮天使を狩り続けることはとても困難で、時には異形だと

気づかれてしまう場合もあるのだ。

「ジェイル、早く記憶を消してあげて。それと、？今日誕生日の可愛いルーシーちゃん？とかかわった全ての人の記憶からも消すから、ちよつと大掛かりになるかも。やってくれる？」

「仰せのままに、ルーシー様」

いつのまにか元の笑顔に戻ったジェイルは、クララを抱えながらルーシーに頭を下げ、新しい閉鎖空間二つを作った。

家具や壁紙、小道具まで淡くやわらかい色合いで、しかしどこか異質なものを感じさせる二つ目の部屋には、中心に大きな天蓋のついたベッドがあった。

二つ目の部屋は白と黒と紅だけで構成された優雅で冷たい印象の部屋だった。

ルーシーが二つ目の部屋に消えるのを見届けると、彼は腕の中でぐったりとしている少女を一つ目の部屋に運び、ベッドに寝かせる。

ジェイルが袖を捲り上げて左右を見渡すと、化粧台の上ののった巻物を取り、床に広げた。

一度に大量の記憶を消すのは、見落としがないように慎重に行わなければならないため、一字一句唱え間違わないように術のかかれた神聖な紙を使うのだ。金の文字が這いつくばるようにして、所狭しと並んでいるそれに一通り目を通すと、クララを一瞥して、また術に目を戻す。

そして、ゆつくりと術を唱え始め、両腕を滑らかに動かして記憶のデリートをはじめた。

そうしてジェイルが仕事を始めたとき、ルーシーは一人、ベッドの上で大の字になっていた。

神の側に付いたものらしからぬ漆黒と純白と紅蓮の入り混じるその部屋は、彼女の趣味だった。

白い天蓋に大胆に刺繍された紅と黒の薔薇に視線を走らせ、端から端まで熱心に見つめる。今は何も考えたくなかった。

しかし、考えたくないと思えば思うほど脳は活発に動き、眸を閉じてまぶたの裏に様々なことが浮かんでくる。

「じつとしてちゃ駄目ね」

思いきり勢いをつけて立ち上がると、クローゼットへと進みドレスを脱ぎ捨てる。

先の戦いでも汗一つかかなかった彼女は、そのままゴシック風のワンピースを取り出して着替える。そして洗面所へ向かうと、大きな鏡に映る自分の顔に血が付いているのを見つける。

どこも痛まず、怪我をした様子がない自分を見て「エドの血だ」とわかる。途端に吐き気がせり上がってきたため、急いで顔を洗うとすっかり化粧の落ちた自分の顔を見つめて、ため息を吐く。

しかしジツとしていればまた瞳に涙がたまる。

ルーシーは泣くことは嫌だった。自分でまいた種であるというのに、情けない声を出してどうするのだと、無理やり気合を入れる。今、記憶が消えるまでの時間、一番つらいのは他ならぬクララなのだ。

となりにあるタオルで顔を軽く拭き、化粧台の前に座る。

黒や赤を選んで、まぶたや唇にのせる。自分が本来してきたメイク。

一年の間に忘れてしまっていないことを確認すると、幼い顔が経

てきた年の数だけ大人っぽく妖艶に見えるのを、自分の顔でありながら不思議そうに見つめる。

ジェイルが記憶を消し終わったそのとき、彼女は次の街へと移動を始める。

墮天使のいないこの地に留まる理由は、何一つないからだ。

十二歳のとき、戦闘能力のために犠牲にした「成長」の影響は今も解けておらず、床に届かない足をぶらぶらとさせる。すると、この部屋に一つしかないドアが控えめに叩かれるのが耳に入った。

「ジェイル？今日はやけに早いわね。今開けるわ」

椅子から飛び降りると、ゆっくりとした足取りで扉まで向かい、そしてその扉を開く。

「こんばんは、ルーシー様」

その声が鼓膜に届いた瞬間に全身に鳥肌が立った。

冷や汗が首筋を伝い、ドアノブから上がろうとしていた視線が思わず止まり、不自然にあたりをただよう。

百年の時を生きてきた彼女だが、天界・下界では何百年と生きることは当たり前のことである。目の前に見えている純白の服に身を包む彼も、もう何百年と六つしかない大天使の座に座り続けている。

そして、威圧的で敵意の感じられる空気を纏ってルーシーに微笑みかけている。

「ぎこちない動きで首を上げて、真っ黒なワンピースの裾をつまみ持ち上げた。」

「……こ、こんにちは。今日はどうしたのですか？アリステア様」

「ええ、そろそろ状況報告として天界が上がってもらいたいのです」

「そう、だったのですね。も、もうそんな時期でしたか」

ルーシーはアリステアのことを少し……いや、とても苦手に思っている。彼は神に直接天界から追放された墮天使だけでなく、その子供や孫も、要するに全ての墮天使を穢れているとしている。

それは、突然変異で墮天使を狩るためにこの世に産み落とされたルーシーとて例外ではなかった。

口元には笑みが浮かんでいるが、その鋭い眼光にはあからさまな侮蔑の色が混じっていた。

いつもは傲慢で女王様のような態度をとることさえあるルーシーも、アリステアの前では緊張で静かでおとなしい少女へと変わる。

「そうです。我らが父は私に貴女を呼びに行くように命令をしました。ですから私はここにいます」

まるで、勘違いするなどでも言いたげにわざわざわかりきったことを繰り返す。

「さあ、早く用意をしてください」

「あ、待ってくださいませんか？ジェイルが今手を離せない状況で……」

「そういえば、大げさにため息をつき、まだ若々しいその顔を歪める。」

「いいですか？それが終わり次第至急天界へ来てください。父は貴女を待っておられません。神を待たせるなど、これだから墮天使は！」

付き添っているジェイルの哀れなことよ!！」

「いい加減にしてください、アリステア様」

自らの後ろに、長身の彼が姿を現せばアリステアは慌ててジェイルの方を向く。

ジェイルは次期大天使候補といわれており、訓練所での兄弟子であったアリステアの溺愛っぷりは天界でも有名になっている。

そんな彼が現れたことに若干の安堵感を覚えながらも、彼が来たという事はクララの記憶から自分が消えたのだという事を意識して表情が暗くなる。

しかし、アリステアも、アリステアに隠れてルーシーの姿を見ることが出来ないジェイルも彼女の表情の変化には気づくことはなかった。

「ジェイル、何を怒っているんだい？それより、修行なんてわざわざあちこち飛び回るものじゃないよ。私のところへきなさい！こんな穢れたもの……」

「アリステア様、いくら貴方様でもそれ以上言えば私は許しません」視線を鋭くするジェイルに、何故だかわからないといった様子でしゅんとするアリステア。その脇を通ってルーシーの元へたどり着いたジェイルは、そっと彼女に手を差し伸べる。

伸ばされた手を力なくつかめば、クララの居る部屋へと向かう。

「何をしているんだ？」

「少しだけ時間を上げてください」

ジェイルが扉の前で手を離し、気を使って二人きりにしてくれた。中央のベッドの上に横たわるクララはすっかり落ち着いていたが、その瞳は閉じたまままで直ぐ側にたつても目を覚ますことはなかった。その体はあたたかいが、まるで生気が感じられない。心臓が鳴り、脈が波打っているというのに死んでいるようだった。

自分の頭の片隅でちらつく少年の姿を、無理やり意識の奥底に埋めてチヨコレート色の髪を撫でる。

額にそつと口づけをして、久しぶりにできた友達に別れを告げる。例えそれが仮初めの姿だったとしても、信頼しあったことがあるという事実は何も変わらない。

扉の外からの催促の音は聞こえない。

ジェイルがアリステアを止めてくれているのだろう。

しかし、何時までも迷惑をかけ続けるわけにはいかない。後ろ髪をひかれる思いだったがクララに背を向けて歩き出す。

キィ

「お待たせしてすみません。いきましよう」

強い決断をしたその瞳の光は、美しくもどこか儚かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0032k/>

Monochrome

2010年10月16日20時20分発行